

研究報告

精神・社会・自然環境の持続可能性

龍谷大学社会学部教授
村澤真保呂

序

先日来日したカトリック教会のフランチェスコ教皇は、社会的排除と環境破壊、精神疾患は深いところにつながっており、同じ問題であると説いた。それらがなぜ同じ問題であるのか。ここでは先の丸山報告の「文化としての自然」という考え方を承けて、「こころの中の里山」という主題で精神と社会と自然環境のつながりを示し、それらの持続可能性の条件を考えたい。

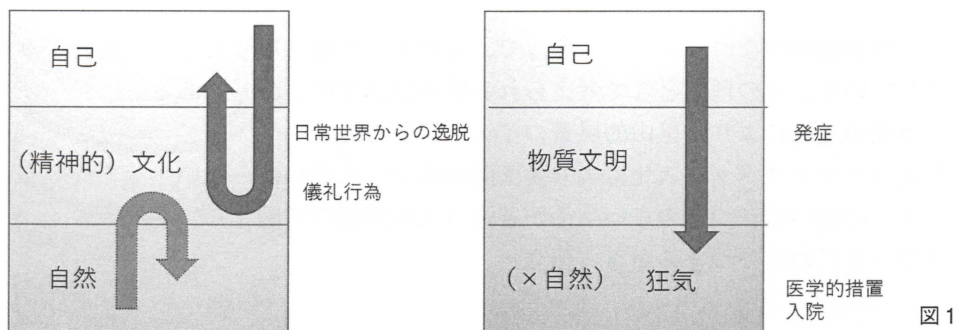
1. こころの中の里山（1）湖東の狐憑きの事例から

唐突だが、ここで滋賀県の狐憑きの事例を手がかりにしてみたい。江口重幸「滋賀県湖東一村における狐憑きの生成と変容：憑依表現の社会・宗教的、臨床的文脈」（『国立民族学博物館研究報告』12(4)、p.1113-1179、1987）では、滋賀県の湖東部で80年代半ばのバブル期まで残存していた狐憑きの二つの事例が報告されている。

狐憑きは伝統社会に特有の精神疾患の表現形態として、文化依存症候群の一種とみなされている。狐が人に取り憑くと信じる宗教や伝承の文化がある地域で狐憑きになった人は、いなり寿司を食べたり稲荷神社へお参りしたりお祓いをしたら、狐が去って、元にもどる。このような文化依存症候群は、儀礼によって霊が去れば、本人は差別されることなくふだんと同じ生活に戻り、周囲の人たちに受け入れられる（社会的に包摂される）という特徴がある。

2. 精神と社会と自然環境のつながり

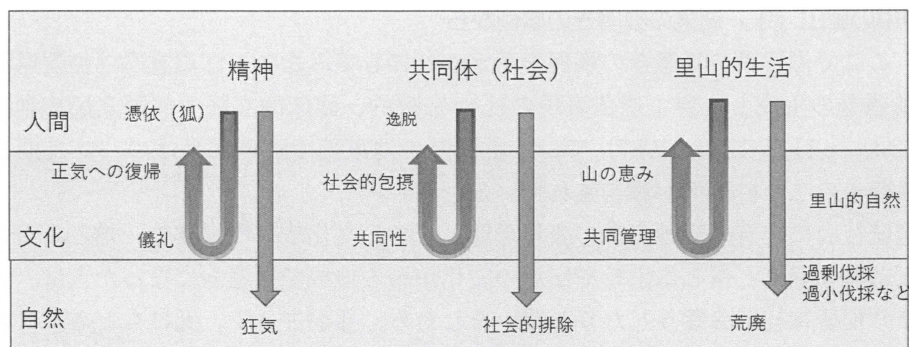
文化精神医学では、かつては宗教的な文化的世界観やコスモロジーが、精神崩壊を食い止めるための防波堤の役割を果たしていたのに、近代社会になってそのような伝統文化がなくなると、防波堤がなくなって、いわゆる狂気に落ち込んでいき、症状が深刻化したと考えられている（図1参照）。



このような文化依存症候群（ここでは狐憑き）は、当然ながら宗教的な共同体がなければ起こらず、そのような共同体は里山的生活を営んでいた。こうした里山的生活を営む個人の精神のあり方、共同体のあり方（社会のあり方）、里山的生活のあり方（自然環境のあり方）には共通の特徴がある。つまり、そこでは伝統的な宗教文化が人間と自然のあいだを結び、人間と社会と自然を崩壊から守る緩衝材の役割を果たしてきたという特徴である。しかし近代になってその文化が失われると、人間と自然の関係に破綻が生じる。

- ① 精神領域では、文化が失われることで「狐憑き」ではなく個人の病としての「精神疾患」となり、たとえば病院で薬物治療の対象となる。
- ② 社会つまり共同体では、こうした逸脱を社会的に包摂する回路が失われ、逸脱者は孤立し、いわゆる社会的排除の対象となる。
- ③ 自然環境では、自然の神々への怖れや感謝の念が失われ、これまで一定の限界を超えないように共同管理されていた森で過剰伐採や乱開発が起こる。

このようにみると精神疾患・社会的排除・環境破壊に共通の根っこがあることがみえてくる。つまり自然と人間をつなぐ文化、とりわけ自然と人間の共生を前提とした宗教的文化が失われたことに共通の源泉がある（図2）。



3. こころの中の里山（2）風景構成法から

それでは現代人のこころの中の里山はどうなっているのか？ここでは70年代に精神科医・中井久夫氏により考案された風景構成法という心理テストを事例として、過去の統合失調症患者の絵と、今の大学生の里山の絵に共通する特徴を示したい。

（以下、著作権上の問題があるため図は省略）

どちらも要素間のつながりが非常に希薄で、絵の中に生活をなりたたせる基盤がみられない点が共通している。その理由として考えられる事柄は以下のとおりである。

- ① 都市化の進展により、里山的風景のイメージがもてない
- ② 生活のブラックボックス化により要素間の結びつきがわからない
- ③ 他者との深い結びつきのない生活が普通（人間関係の貧困化）
- ④ 世界と自己の結びつきのなさ（孤立）

このような状態では自然共生型社会・持続可能社会の具体的なイメージをもてないのは明らか

かである。彼らのこころの中の殺伐とした里山の光景は、将来に現実になる可能性を多分に秘めている。というのも将来、里山の問題に無関心な大人が多数を占めれば、必然的に里山は放置され、荒廃がさらに進むからである。

4. 課題

先話をふまれば、例に挙げた大学生たちに必要なのは自然と人間生活のあいだの関係を結ぶ世界像であり、いいかえれば持続可能な生活の具体的なモデルである。かつての里山生活とは異なり、いまの都市生活はその実感をもちにくくだけでなく、そのための機会と場所が減る一方である。ところで、かつての伝統的宗教は世界と自己、自然と自己の関係をさまざまなかたちで示してくれたが、現在の私たちは宗教の時代に戻ることはできない。そうであれば、かつての宗教的な文化的回路に代わってその役割を果たす新たな文化的回路をつくる必要がある。水や食べ物がどこからくるのか、自分は世界のどのような位置にいるのか、人や生き物たちとどう関わっているのか、そこで自分はどのような責任をもっているのか。若者たちがそのようなことを学び、こころの中の持続可能社会のモデルをつくるための場所と時間が用意されるべきと思われる。